

# REACT

2014年12月号



## エボラ出血熱 時間との闘いに加速を!

### コンゴ民主共和国 非常事態が日常になった国

シリア 戦火からの距離、帰郷までの距離  
南スーダン 死と隣り合わせ、長引く避難生活  
派遣スタッフの声(シェラレオネ/パレスチナ)



### 期待を乗せ——無人機、初の試験飛行!

太平洋の島国パプアニューギニアで子どもたちが熱い視線を送るのは、国境なき医師団(MSF)が米マターネット社と開発中の無人プロペラ機。MSFは現地で結核対策の改善に当たりますが、雨期に泥沼に変わった道路、ワニが潜む川など、交通事情の悪さが課題です。そこで、へき地の診療所から結核検査を行う町に検体を運ぶため、スマートフォンでも操作できる無人機の導入をテストすることに。早期の発見・治療が重要な結核対策に、活躍が期待されています。



### 特定非営利活動法人 国境なき医師団日本

寄付や『REACT』に関するお問い合わせ

0120-999-199 (9:00~19:00 無休)

〒162-0045 東京都新宿区馬場下町1-1 早稲田SIAビル3階  
Tel : 03-5286-6123(代表)

[www.msf.or.jp](http://www.msf.or.jp)

『REACT(リアクト)』は国境なき医師団(MSF)日本が発行するニュースレターです。MSFが活動現場で目撃する世界の人道的危機と、命を救うための人道援助活動についてお伝えし、ともに考えていただくための情報をお届けします。

国境なき医師団は、1971年にフランスで設立された、非営利国際的な民間の医療・人道援助団体です。危機に瀕した人々の緊急医療援助を主な目的とし、医師、看護師をはじめとする約6000人の海外派遣スタッフと、約3万人の現地スタッフが、約70の国と地域で活動しています(2013年度)。

### アンケートのお願い

国境なき医師団の活動地の状況と活動内容をより分かりやすくお伝えするために、ぜひアンケートにご協力ください。郵送またはウェブサイトから、ご回答いただけます。アンケートにご協力いただいた方の中から抽選で5名様に各種MSFグッズ(右写真は一例です)を差し上げます。

郵送 郵便はがきに、ご住所、お名前、年齢、職業、アンケートの回答をご記入のうえ、左記の住所までお送りください。2015年2月末日消印有効

宛先 国境なき医師団日本・広報部宛

Web トップページ→MSF図書館→『REACT』2015年2月末日まで受付

※お寄せいただいた個人情報はアンケート分析にのみ利用いたします。

◎次の①~④には[ア そう思う イ そう思わない ウ どちらともいえない]から選択して、⑤⑦には自由回答で、⑥には[はい いいえ]でお答えください。

①世界の人道危機や医療ニーズへの理解は深まりましたか。②MSFの活動への理解は深まりましたか。③MSFや派遣スタッフを身近に感じることができましたか。④今後もMSFを支援していくと思いますか。⑤特に印象に残った記事を2つ教えてください。

⑥過去のニュースレターを保管していますか? ⑦ご意見・ご感想を自由にお聞かせください。



# 数字の陰に、 それぞれの命の闘いがある

エボラ出血熱による死者、約5000人、  
感染者1万3000人以上<sup>\*1</sup>、シリア国内避難民・難民は計950万人以上<sup>\*2</sup>、  
コンゴ民主共和国で続く紛争では推計540万人<sup>\*3</sup>が死亡……。  
その大きな数字の陰で、一人ひとりの命の闘いはいまも続いています。  
私たちは、彼らの生を支えるため傍らに駆けつけ、その命の闘いを伝えていきます。  
本年も、国境なき医師団へのご支援を誠にありがとうございました。  
頂いたご支援にはまたそれぞれの、命を巡る思いが込められていることを  
心に刻み、活動を続けてまいります。

\* 1 2014年10月31日、世界保健機関(WHO)発表

(報告死者数: 4951人、感染者数: 1万3567人)

\* 2 2014年8月29日、国連難民高等弁務官事務所推計

\* 3 第一次コンゴ紛争開始以降の紛争関連死者数(1998~2007年)、  
International Rescue Committee "Special Report: Congo", 2007.



## 2014.12 CONTENTS

### ACTIVITY NEWS

4 コンゴ民主共和国  
非常事態が日常になった国

6 エボラ出血熱  
時間との闘いに加速を!

8 中央アフリカ共和国 IN FOCUS  
着地点はどこに—  
空港で人びとの生活は続く

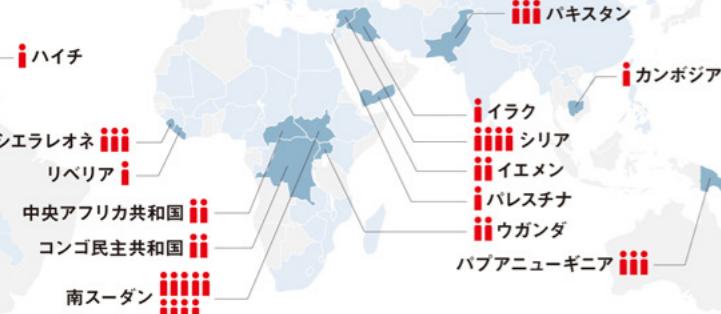
10 南スудан  
死と隣り合わせ、  
長引く避難生活

7 VOICE 派遣スタッフの声  
大滝 潤子 (看護師/シエラレオネ)  
吉野 美幸 (外科医/パレスチナ)

13 Field Stories フィールド・ストーリーズ  
畠井 智行 (看護師/エチオピア)  
小口 隼人 (ロジスティック・コーディネーター/パキスタン)

14 支援者の声

今号掲載国  
国境なき医師団の活動国・地域  
MSF日本からの派遣者数(14ヵ国・35人/2014年10月22日現在)



### The Reach of War 戦火からの距離、帰郷までの距離

シリアが内戦状態に陥って3年半。推計19万人が命を奪われ、950万人が家を追われたといいう数の大きさ、その陰には、一人ひとりの苦難が……。シリア紛争を巡る、ある1日を切り取った写真シリーズをご紹介します。

MSFは2012年6月以来、シリア北部で10万件以上の外来診療を実施。またシリア人が運営する約100ヵ所の病院・診療所も支援している。周辺国でもシリア人難民を対象に58万件以上の診療を提供している。



工ボラ、時間との  
闘いに加速を！

今年3月中旬にギニアで始まつた西アフリカ諸国のエボラ出血熱の流行。未曾有の規模で感染拡大が続く中、国境なき医師団（MSF）は、この悲劇を食い止めるため、国際社会の支援参加が不可欠であることを訴え、懸命の医療活動を続けています。



- 1 シエラレオネ・カイラフンのエボラ治療センターで看護にあたるMSFの看護師。
- 2 リベリア・フォヤ治療センター。ハイリスク区域から出るスタッフは消毒を受ける。
- 3 ギニア・ケグドウ治療センターで、患者の退院には皆、笑顔が強ける。

シェラレオネ

過去最大のエボラ出血熱の流行  
80床の専門治療センターで  
目の当たりにした現実



看護師  
大滝 潤子

都内にて9年間、内科病棟、手術室看護師として勤務。カナダ、米国にて語学を学び、2012年よりMSFに参加、手術室看護師としてイラク、ヨルダン、南スーサンで活動。2014年7月30日から9月10日まで、シエラレオネのエボラ出血熱緊急援助活動に参加する。

シエラレオネの首都フリータ  
から丸1日かけて国境なき医  
(MSF) のエボラ治療センタ  
あるカイラファンに到着。防護服  
用、医師と共に隔離病棟に入

シエラレオネの首都フリータウンから丸1日かけて国境なき医師団(MSF)のエボラ治療センターがあるカイラファンに到着。防護服を着用し、医師と共に隔離病棟に入ったときに初めて、それがどんなに大変な使命であるのかを実感しました。気温も湿度も高い中で集中力を保ち、細心の注意を払つて行う医療提供。体力はすぐに消耗し、防護服の中では大量の汗とともに、脈拍が速まっているのが分かる。ゴーグルは曇り始め、視界が遮られる……。安全確保のため1時間で出る規則とは



防護服を確実に着用するため、同僚と組みになってチェックする。



ホームページ集まり 治療方針の確認

私は現地の看護師と看護助手に指導・助言をする立場でしたが、私自身も看護師として現地スタッフと共に回診・投薬も行いました。エボラ熱の場合は解熱剤を、痛みがあったら痛み止め、吐き気や嘔吐がある患者には吐き気止めを投与。また常に経口補水液の摂取を促して下痢による脱水を予防し、食事や水分がとれなくなつたら点滴の投与を行います。ただ、残念な事に患者の半数以上は亡くなってしまいます。そのた

に深い爪痕を残すのです。  
しかし反対に、治癒して退院していく患者もたくさん見ました。私たちスタッフにとって、退院する人たちの笑顔、隔離病棟から解き放たれた瞬間と共に分かち合えること、それは無上の喜びでした。

徐々に体力を消耗し、出血などで苦しみながら亡くなつていく患者さんたち。そして、家族が離ればなれになつたり、両親が亡くなつて小さな子どもが取り残されることも。亡くなつていく母親にすがりつき、泣き叫ぶ子どもを見ました。エボラは、死から免れた人にも、その後の人生

強く感じたのは、エボラ出血熱はただ他国の惨事ではない、ということです。人びとが世界中を移動する限り、いつ何時、私たちに起きてもおかしくない事象であり、私たち自身が正しい知識を持たなくてはなりません。今後もこのウイルスがどれだけまん延し、どれだけの人の命を奪っていくのか分かりませんが、この惨事が1日も早く終結することを願つてやみません。



エボラを克服して退院する患者さんには  
完治証明書が授与される。

### ● カイラフンはどんな町でしたか?

周りをジャングルで囲まれたような、熱帯の木々の緑や田園風景が美しい所です。車でも歩いていても、現地の人びと、特に子どもたちは、外国人が珍しいのか、「ブムウィ（肌の白い人）」と呼び、手を振ってくれます。数回あったお休みの日に、町に服を仕立てに行った事が一番の思い出です。アフリカらしいすてきな柄のドレス（右上写真参照）とパンツができるまでました。



3月から最前線で活動

対応の遅れ、取り返すには

次々に展開しました。ギニア、シエラレオネ、リベリアの計6カ所に専門治療センターを設置。10月末までに感染の疑い例を含む5200人を受け入れ、うち約3200人にエボラ感染が確認されました。致死率の高い疾病ながら、治療によつて、1200人以上が回復しています。

感染が比較的小規模だつたセネガルとナイジエリアでも技術支援を提供。また8月に西アフリカとは別のエボラ流行が発生したコンゴ民主共和国でも治療活動を行つています。

3月以降、西アフリカの流行地に派遣したスタッフは700人以上。現地採用の3000人以上のスタッフと共に、未曾有の流行を食い止めるため、懸命に取り組んできました。

現地での生活と活動にはエボラの感染リスクも伴い、残念ながら10月30日までにスタッフのうち23人が感染。8人が回復しましたが、13人が亡くなりました。スタッフの感染事例については感染経路・原因の徹底的な調査を行つていますが、その大半はエボラ治療センター外で発生したことことが確認されています。

隔離施設と、適切な知識・技術をもつた医療スタッフの拡充です。

現地では不安と混乱が広がり、医療体制全般もひつ迫。患者や、家族を失つた人びとは過酷な経験を負いながら、疎外にも直面しています。

シエラレオネで活動中に自らもエボラに感染し、地元ノルウエーの病院で治療を受けて回復したセリエ・レーネ・ミカルセン医師は、自らの幸運に深い感謝を捧げつつ、現地の患者が置かれる厳しい状況を訴えるコメントを発表しました。

「国際社会の議論はようやく、單なる談話や資金援助から現地での実践的な対応に移行しましたが、既に多くの時間が費やされてしまいました。世界が数ヵ月早く行動を起こしていれば状況は全く違い、多くの命と家庭が救われていたでしょう。

時は刻々と過ぎ、さらに多くの人が亡くなっています。行動しなければなりません。それも、いますぐに、です。私の感染事例があつてもくじけることなく西アフリカで闘いを続ける多くの皆さんのがいること。その意志を、心強く感じています」

ギニアでのエボラ出血熱流行を受け、MSFが緊急援助活動を開始したのは今年3月。その後、西アフリカ諸国での感染拡大に伴い、対応を

治療薬やワクチンの開発に国際社会の取り組みも始まりましたが、最も急務の課題は、感染拡大を食い止めるため、十分な対応装備を備えた



## 着地点はどこに—— 空港で人びとの生活は続く

2012年12月のクーデター以降、内戦状態に陥る中央アフリカ共和国。キリスト教系とイスラム教系の対立、農耕民と遊牧民の対立、統率を失った武装勢力による蛮行、報復の連鎖……。紛争の背景には複雑な対立構造があり、解決の糸口は見えません。

首都パンギでは2013年末に激戦が始まり、数十万人の市民がムボコ国際空港に逃げ込みました。今年9月の時点でも2万人以上が、放置された飛行機の間で暮らしています。明日の見えない状況下で生き抜かねばならない人びとの命と健康を支えるため、国境なき医師団(MSF)は空港敷地内で病院1ヵ所と診療所2ヵ所を運営。今年8月までに11万件以上の診療を提供し、また約1500人の新しい命が、ここで分娩介助を受けて誕生しています。



2015年

1月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31

2月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28

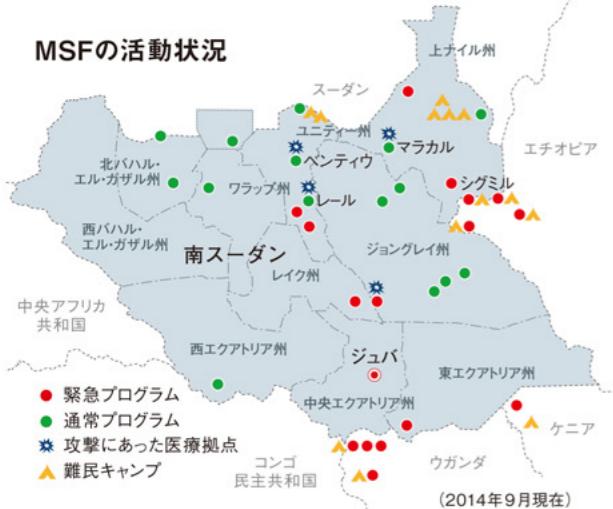
3月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31

4月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30

5月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31

6月 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30

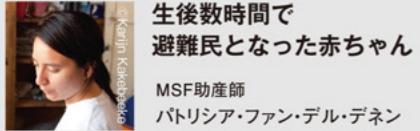
## MSFの活動状況



	49万8495件		2万9919件		1万2702件		3378件
外来診療		入院診療		分娩		外科手術	
41%		50%		5歳未満児童の割合		2888件	
5歳未満児童の割合		5歳未満児童の割合		戦闘被害の負傷の治療			

(2013年12月～2014年9月)

## 活動地からの声



生後数時間で避難民となった赤ちゃん

MSF助産師  
パトリシア・ファン・デル・デネン

上ナイル州ナーシルにあるMSFの病院で、産科病棟の運営に携わっていた私が、戦闘のため避難を余儀なくされたのは、任期を満了し帰国を控えていたときでした。避難先のシグミル村に着いて2日目、病院に残ったスタッフから、患者が搬送されて来たと衛星電話に連絡が入りました。母親がけいけんを起こしているという症状から母子双方の命に関わると判断し、引き返すことにしました。私たちが到着すると、無事、出産は終わっていましたが、再び母親が激しいけいけんを起こしました。措置を施した後、赤ちゃんに抗生素を投与しようとしたとき、現地スタッフがやって来て叫びました。

「逃げろ、戦線が近づいている！」

点滴を刺したままストレッチャーに横たわる母親と、赤ちゃんを乗せてボートは出発しました。無事、避難先の診療所に到着してお乳を飲む赤ちゃんを見て思いました。

こんな理不尽な人生があるだろうか。生まれて1日も経たずに、避難生活だなんて——。



# 死と隣り合わせ、長引く避難生活

## COUNTRY DATA

2011年7月に独立を果たすも問題が山積。昨年12月に激しい武力衝突が勃発、全国に広がった戦闘はいまだ終息の見通しが立っていない。MSFは約30年前から全土で活動を行って来た。現在、3600人以上のスタッフが10州中8州で25のプログラムを展開している。

膝まで浸水した難民キャンプで、子どもを抱いて立ったまま眠る人。紛争を逃れ、身を潜めたやぶの中、沼の水と木の根で命をつなぐ人。

昨年末、首都で起きた衝突以降、内戦が激化の一途をたどる南スードン。

国に留まつても、隣国へ逃れても、そこで人びとを待ち受けているのは死と隣り合わせの過酷な現実です。

紛争のために南スードン国内で避難生活を余儀なくされている人は、150万人。過酷な生活は、人びとも健康に影響を受けやすい子どもたちが危機にさらされているのです。全土における栄養失調児の急増も、昨年1年間の治療件数に相当する1万6000人にも上ります。

初夏には雨期の到来により、避難する人びとが暮らすキャンプが浸水。4万人が滞在するユニティー州の州都ベンティウにある国連施設は、7月の豪雨で1000世帯以上の住居に下水の混ざった水が流れ込み、子どもを抱いて立つたまま眠る人もいたほどです。9月以降、水は引いたものの、周辺地域の情勢不安は続き、人びとは先の見えない生活を強いられています。

このような不衛生な状況は、コレラの蔓延を引き起こしました。MSFは、コレラ流行宣言の出た5月中旬から全国症例数の半数以上にあたる3300人を治療。同国初の試みとなるコレラワクチンの集団予防接種も実施しました。国内避難民20万人と地域住民に加え、エチオピアの南スードン人難民15万人も対象とした大きなプロジェクトです。MSFのほか、保健省や他の援助団体も実施した取り組みが功を奏し、コレラ流行は終息しましたが、治療しなければ死に至る感染症カラザールの流行拡大など、この国には膨大な医療ニーズが残っています。

MSFインターナショナル事務局長のジエローム・オベレは、9月に開催された国連総会で、援助体制はまだ遅れをとつていると、国際社会へ支援拡大を呼びかけました。今後もMSFは、南スードン内外で過酷な避難生活を送る人びとのため、命をつなぐ医療に全力で取り組んでいきます。

## 避難生活が健康をむしばむ





## あなたの寄付で ワクチンを送ろう! キャンペーン

[受付期間]  
2014年  
12月31日  
まで

ワクチンにより、命に関わる病気から守られている子どもは、毎年推定200万～300万人。一方で、年間150万人の子どもたちが予防接種<sup>\*</sup>を受けることができず、予防できたはずの病気で命を落としています。

皆さまのご支援で1人でも多くの子どもにワクチンを!

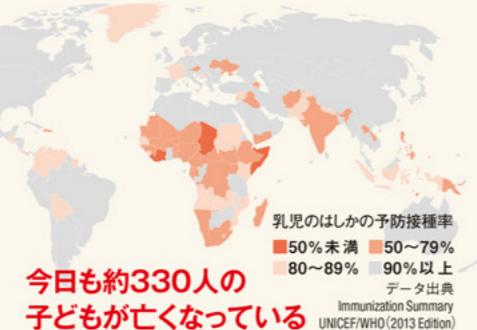
**3,000円で**  
使い捨て滅菌注射器×1140本      **5,000円で**  
はしかワクチン×200人分

\*世界保健機関(WHO)が推奨しているDTP(ジフテリア、破傷風、百日咳の3種混合ワクチン)、B型肝炎、B型インフルエンザ(ヒブ)、BCG(結核)、ヒトパピローマ、はしかの予防接種。



### 5人の子どもにも ワクチンを

紛争、貧困、医療システムが整っていないなど、予防接種を受けることができない理由はさまざま。特に発展途上国の子どもたちの予防接種率は低く、5人に1人は予防接種を受けることができていません。



### 今日も約330人の 子どもが命を落としている

はしかの予防接種で、2000年から2012年の間に約1400万人の命が守られました。一方、はしかによって毎日約330人の子どもが命を落としています。その多くはアフリカとアジアの途上国の子どもたちです。

データ出典 2012年WHO調べ

ご支援  
いただける方は  
ここを  
クリック!



または、ワクチンキャンペーン 検索

これまでの寄付金額  
**148,931,199円**  
ご支援いただいた方  
**17,843人**  
はしかワクチンに換算した場合  
**5,957,247本**

10月22日時点のデータです。

## 寄付金控除のご案内

国境なき医師団(認定NPO法人)への寄付は、所得税、法人税、相続税、一部の自治体の住民税について、税制上の優遇措置の対象となっております。

### 個人による寄付

①か②のいずれか有利な方を選択できます。詳しくは最寄りの税務署にお尋ねください。

①所得控除 下記の計算式による金額が「所得」から控除されます。

$$\text{寄付金合計}^* - 2000\text{円} = \text{寄付金控除額}$$

※ 所得額の40%が上限。

②税額控除 下記の計算式による金額が「所得税額」から控除されます。

$$(\text{寄付金合計}^* - 2000\text{円}) \times 40\% = \text{税額控除額}^*$$

※1 所得額の40%が上限。 ※2 所得税額の25%が上限。

控除を受けるには確定申告が必要となります。年末調整では申告できませんので、ご注意ください。  
住民税については各自治体へお問い合わせください。

### 法人による寄付

国境なき医師団への寄付は、一般の寄付金の損金算入限度額とは別に、下記の特別損金算入限度額の範囲内で損金に算入できます。  
詳しくは最寄りの税務署にお尋ねください。

$$(\text{資本金等の額} \times \frac{\text{当期の月数}}{12} \times 0.375\%) + (\text{所得の金額} \times 6.25\%) \div 2 = \text{特別損金算入限度額}$$

寄付に関するくわしい情報はこちらから

Tel **0120-999-199**  
(通話料無料、9:00～19:00／無休)

Web [www.msf.or.jp](http://www.msf.or.jp)

携帯サイト [www.msf.or.jp/mb/](http://www.msf.or.jp/mb/)  
右のQRコードからもアクセスいただけます。



## 支援者の声

国境なき医師団(MSF)日本の事務局には、支援者の皆さんから日々、さまざまなメッセージが届いています。皆さんが活動に関心をお寄せくださっていることが、私たちスタッフにとって何よりも大きな励ましです。ご本人から掲載の了解をいただいたお便りを、ここにいくつかご紹介します。

### 東京都 高橋祐子様(40代)からのお手紙

普段はろくにTVニュースを見る時間もなく、紙の新聞も購読を止めて久しく、インターネットのニュースで小見出しを眺める程度の私の日常に、『REACT』は、もっと知らなければいけなかつたことを届けてくれるすばらしい広報誌です。記事も立派ですが、多くの情報を伝え、訴えかけてくる写真には、思わず見入ってしまいます。寄付を始めてから1年を迎えたときに、送付された手紙に同封されていた「スーダン、ダルフール地方の炎天下で、何時間も食糧配給を待つ女性たち」のポストカードも、裏面の短い写真キャプションと共に、胸を打たれました。自分がもっと大金持ちで、もっと寄付ができたなら良かったのに、あるいは医療従事者だったら参加できたかもしれないのに、と残念に思うこともあります。しかし、私のできる限り可能な範囲で、周りの人々に話して伝えることを含め、MSFを応援したいと思っています。広い視野を持ち、考え方で国境を作ることなく地球人として生きたいなど、そんなふうに感じさせてもらうことができ、ありがたいと思っています。



### 三重県 村上千佐子様(50代)からのお手紙

世界各地での、文字通り命をかけての活動、本当に頭が下がります。私たち日本人は、東日本大震災の後、とても内向きになってしまったように感じています。世界中の人が日本のことや心配してくれたのに……。でも、MSFの活動がもっと広く知られれば、人びとの意識も変わるので、と思います。新聞や雑誌などに、記事や広告がもっと載るといいと思います。



特に、『REACT』6月号の出水真輝くんのように、子どもたちに小さい頃からMSFのような人道援助活動を知っておいてもらうことは、とても重要だと思います。

いただきましたお言葉に恥じないように、スタッフ一同、これからも真摯に活動を続けてまいります。  
お便り、ありがとうございました。



教えるはずの、多くの命のために。  
遺産・お香典からの寄付で、その遺志は希望に変わります。

遺産や相続財産の有意義な活用のために、MSFへの寄付を選ぶ方が増えています。パンフレットをご希望の方は、同封のチラシをご返送いただくか、下記のウェブサイトまたは電話にてお申し込みください。MSF日本に寄付していただいた遺産は非課税扱いとなります。

Web [www.msf.or.jp](http://www.msf.or.jp)  
(トップページ下段 → 資料請求)

Tel **0120-999-199**  
(9:00～19:00 年中無休)